

(私にも 田をすく ことが出来るだろうか。)

61 /'wanuNkara ciQko'ocimi'i mi'iga./

(私にから 使わせてこらん、おねがい。)

62 /'wanuNdaki misitikara muQcipa'jutaN./

(私にだけ 見せてから 持って行った。)

63 /'wanuNgadi tabeNci'i./

(私にまで 下さるのか。)

64 /'wanuNtu ?ariNtu turasi./

65 /'wanuNdu ?urja'a sirarju'uru./

(私にしか それはできない。)

66 /'wanuN'N ?urja'a sirarjuN./

(私にも、それは できる。)

川 内 君 の こ と

藤 原 与 一

川内君が与論島から入学してきてくれた時は、ほんとうにうれしかった。あの興味ぶかい与論ことばが、じかに聞けるのだと思うと、そのことでだけでも、私は感動をおさえることができなかったのである。

やがて二年生になったころであつたろうか。君から、方言を、しかも郷里の方言を研究したいという願望を聞いた。それ以来、君の方言研究活動はしだいに発展していったようである。正課の教室でも熱心だった。

私は、時おり話しあつたものである。

“君、方言をやるためにも、言語学教室での勉強を、しっかりやりたまえ。大いに外国のものに親しんで、やがて本格的な方言研究家になりたまえ。”

“ハア。”

というようなことであつた。じっさい、私は、川内君に期待した。南島出身者が、本格的に南島方言の研究をやりだしたら、すばらしくらうと思った。川内君には特に、奄美群島の精密な研

究を期待した。——今もこの気もちは変わらない。奄美群島の専門家になってもらいたいのである。しかし、今や君は居ない。残念至極である。

私は君につねに言った。よく関本先生の御指導を受けなさい、と。もとより、川内君は言語学教室の学生である。私がかねにものを言いすぎてはならない。この注意はつねに厳格に守ったつもりである。関本先生からも、いろいろ、川内君のことをお聞きした。

三年生の川内君は、一つの大きい仕事をしてもらったのは、いちばん心にとどまっていることである。それは、西洋諸国の方言研究文献を整理し原稿にしてもらった仕事であった。君は熱心にカードを作った。西洋の前に、中国関係のも、カード化した。

中国関係では、西谷先生の御教導を頂いた。東・西ともに、教育の横山君などが、よく手づかってくれたと思う。西洋関係のカードの整備と原稿化とが、進まないの、ついせつかちにもを申したりしたのは、私の痛恨事である。（伏しておわびする。）そのうちに、他の諸君の協力もあって、川内君の労作は、私どもの「方言研究年報才七巻」（1964年）に載せられた。その文献目録は、識者に注目されている。川内君の功である。

これからというところであった。だのに、研究の峠にさしかかった君が、急にこの世を去った。まことに、夢を見るこちである。どんなかげんだったのかと、いとおしくてならない。と同時に、私ごとき、君に対して、じつに至らなかったと、申しわけなく思うのである。

“川内君。ゆるしてくれたまえ。”と、くりかえし申さないではいられない。

ひとえに、御冥福を祈る。

(4 1.7,2 3)

川内君を憶う

関 本 至

大学の構内を歩いていて、前に行く学生の姿や建物のかげから出て来た学生などを見て「あ、川内君じゃないか」とふとそう思うことが今でもときどきある。そして数瞬のあと「ああ、そうだ、彼はいないのだ」と思い返して、言うに言えない淋しさを感じるのである。

川内且昭君は、日本の西南端、奄美大島のそのまた一番南のはしの与論島に生まれ、大島高校を経て広大文学部に入学したのが、四年半前の昭和三十七年四月であった。人の知るように奄美大島の言葉は日本語の中でもきわめて特異な方言をなしている。川内君は、すでに入学以前より、自分の育ったこれらの島々の言葉の研究に大きい関心をもっていたらしい。それが言語学科専攻